

J・D・サリンジャー 著
『The catcher in the rye』
(講談社英語文庫)

『ライ麦畑でつかまえて』
(白水社 野崎孝訳) [908A1-20]
『キャッチャー・イン・ザ・ライ』
(白水社 村上春樹訳) [933S241]

「発表から半世紀、今なお世界中の若者たちの心をとらえつづける名作の名訳。永遠の青春小説」と謳われているこの作品は、物質的繁栄を享受するアメリカ中流階級に生まれた多感な思春期の少年のやり場のない苛立ちを描くという物語である。お世辞にも上品とは言えない言葉が多いので、拒絶反応を起こす人がいるかもしれない。ただ、読みすすめていくうちに、この「ライ麦畑でつかまえて」は決して下品な小説ではないことがわかる。自分に身に覚えのある潔癖感、辛辣さ、大人になることへの畏怖、インチキなものに対する猜疑心、「これ、自分の事を書かれているのでは？」と思つた人間がきつと世界中にたくさんいるのではないかとと思う。野崎訳では「ホールデンは常に気取っていて、カッ

コつけているイメージ」であるのに対し、村上訳では「ホールデンが情緒不安定なイメージ」と、同じ作品であるにもかかわらず翻訳者によって微妙に印象が異なってしまうのもこの作品の魅力の一つであり、比較してみると大変興味深い。

ただこの本を読むのではなく、他の人の読み方や意見や解釈を聞いて、自分とは違ったものの見方、考え方を知って、改めて読み直してみてもこの作品を楽しむ。そうした楽しみ方も踏まえ、皆さんに一読を勧めたい。

※サリンジャーは、自分の情報が明かされるのを極度に嫌った人。故にその生涯は謎多く神秘的です。それを敢えて暴こうとしたイアン・ハミルトンの『サリンジャーをつかまえて』[930H91]という本も読んでみてください。(K)

宮田親平 著

『毒ガス開発の父ハーバーに愛国心を裏切られた科学者』
(朝日新聞社)

私は三年生化学の授業を担当する時にこの本を紹介していま

す。ドイツ人であるフリッツ・ハーバーは高校化学の教科書にも登場し、ハーバー・ボッシュ法を開発してノーベル賞を受賞した。この方法で、アンモニアの人工生成が可能になり、合成肥料の作成をすることができるようになった。これが、食糧危機を救い、ドイツの人口増加に大きく貢献した。しかし、アンモニアは爆薬の原料にもなりえたので、第一次世界大戦の兵器となった。

ハーバーは、ドイツの形勢が悪くなると、早く戦争を終わらせたいがために、毒ガス開発に従事していく。

第一次大戦敗戦後、手を差し伸べたのが、日本の星製薬の創業者星一であった。そして北海道帝国大学で講演を行った。その後、ハーバーの弟子であるメッツナーが、日本に対して毒ガスの開発技術を指導し、広島県の大久野島で製造工場が建てられ、毒ガスの開発が進められた。そして、日本は第二次世界大戦に突き進んでしまふわけである。

ユダヤ人であるがために、ド

読書案内

イツ人になりきろうと努力したハーバーであったが、同じユダヤ人の同胞であるアインシュタインに「才能を大量虐殺の為に使っている」と非難され、結局、ハーバーのしたことは、戦争を早く終わらせることではなく、戦争の長期化を招いた結果となり、戦犯扱いされた。愛した国に最後は裏切られ、国外追放された。祖国の地で人生を閉じることができなかつた生涯に私は悲しみを禁じ得ない。

このように、本を通じて化学に興味を持っていただけだと幸いである。

高橋歩 著

『毎日冒険』
(サンクチュアリ出版)

3年前までは田舎の小規模な学校で仕事をしていました。そこで出会った子どもたちは、早くて中学卒業後、多くが高校卒業時には地元(親元)を離れて生活をします。子どもたちと接する中で「ここで学んだことは他の所へ行っても通用するのだから、どんな環境でも生きていくための基本は何だろう。」と

考えるようになりました。私自身、田舎での生活経験しかないこともあり、このまま同じ環境しか知らずに今の仕事を続けていく事にもどかしさがありました。でも他の所へ行く決心がなかなかつきませんでした。そんな時、気持ちを行動に移すか移さないかで、得るものが全然違ふという事を私は彼の本から学びました。彼は、高校三年の頃、自分の「なりた職業」が分からずにいました。そこでまずは好きな事を見つけることから始めました。好きになる動機が単純すぎて笑えるのですが、その好きなものを究めるための行動は並大抵のものではありません。結果、無一文で、未経験で、コネがなくとも、自分の店を始めたり、自分の本を出したり、自分の会社まで作り上げるまでになります。年齢を言い訳にしたり世間体を気にしたりせず「とりあえずやる！」のが彼の中のルールです。そんな彼の行動力に心を動かされ、私は長年住み慣れた場所を離れました。人と物であふれている大阪生活はまさに「毎日冒険！」といった感じです。皆さんも究めたくなるような「好き」な事に会えるといいですね♪